

伊予灘におけるマコガレイ親魚の標識放流について

栽培資源研究所 浅海調査室 主任研究員 黒野美夏

はじめに

マコガレイは、北海道南部から本州、四国、九州、東シナ海北部まで水深 100m 以浅の砂泥部に広く分布するカレイ目カレイ科の魚類で、大分県の城下ガレイなど高級ブランド魚として取り扱われています。愛媛県内では「あまてかれい」や「あまて」と呼ばれ、1kg あたり 1,000～3,000 円と高値で取引されています。

マコガレイの生活史

愛媛県伊予灘海域では、産卵期は1～2月で、産卵場は八幡浜市～伊予市の沿岸に分布し、八幡浜市保内町磯崎沖の「ほぼろ瀬」には、産卵群が集まると言われています。浮遊期仔魚（写真1）は、2～3月に伊予灘東部全域に分布しています。

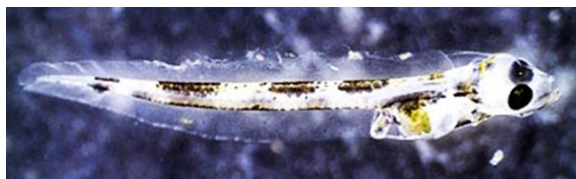


写真1 マコガレイ浮遊期仔魚

そして、着底期稚魚は、4～6月に水深3～15mの沿岸部に着底します。その後水温の上昇に伴い、沖合へと移動していきます（図1）。

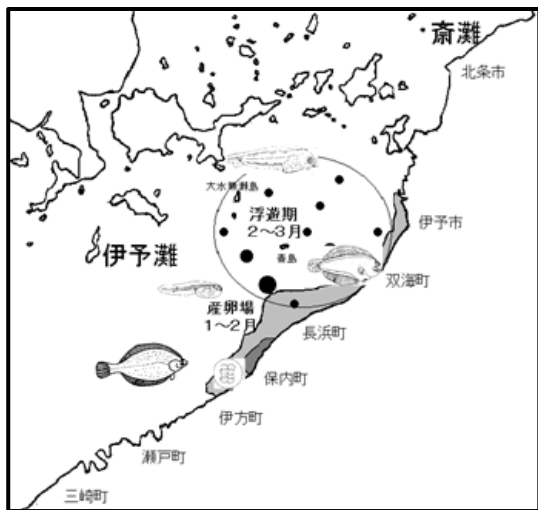


図1 マコガレイの生活史

マコガレイの資源回復への取り組み

伊予灘の漁獲物が集まる松山市中央卸売市場における愛媛県産マコガレイの取扱量は、平成7年頃までは40トン以上ありましたが、平成22年には5トンにまで減ってしまいました。

愛媛県では、伊予灘のマコガレイ資源を回復するために、八幡浜漁業協同組合磯津支所磯崎地区の漁業者の方々とともに、「ほぼろ瀬」に集まってくる産卵親魚の保護に取り組んでいます。

その活動の一つに、産卵親魚の再放流があります。愛媛県では、平成23年度から、親魚の移動状況などを調査するため、一部の魚に標識を装着して放流しています。磯崎沖の建網で漁獲された親魚に、全長と体重を測定し性別を確認してから、標識としてデータタグを装着し放流しています（写真2と3）。



写真2 標識装着作業風景



写真3 標識（上）と標識装着魚（下）

放流魚の再捕状況

平成23～25年度の3年間で、765尾の親魚を標識放流しました。一部試験的に、栽培資源研究所のある伊予市森でも放流しました。そのうち64尾が再捕されました。その再捕状況を表1と図2に示します。産卵期に放流しているため、経過期間の1ヶ月以内、1年後および2年後が産卵期にあたります。

表1 放流魚の再捕状況

再捕場所	放流後経過期間				
	1ヶ月以内	2～5ヶ月後	1年後	15～16ヶ月後	2年後
磯崎沖	28		20		3
長浜・松前沖	1	4		1	
島嶼部		2	1		
別府湾		2			
北条・菊間沖		1		1	

放流してから再捕されるまでの期間が1ヶ月以内のものが29尾、2～5ヶ月後のものが9尾、1年後のものが21尾、15～16ヶ月後が2尾、そして2年後が3尾となっています。

産卵期に再捕されたものは、放流後1ヶ月以内でも、1年後でも、2年後でもほとんどが主要な産卵場と考えられている磯崎沖で再捕されています。1月中旬に伊予市森で放流したものが、2週間後に磯崎沖の建網で漁獲されたこともあります。

これらのことから、磯崎沖のほぼろ瀬周辺が、優れた産卵場であり、毎年、親魚は、産卵のためにこの海域に帰ってきていると考えられます。

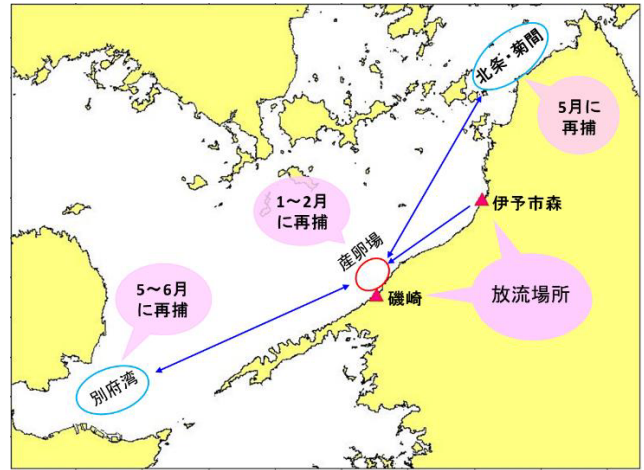


図2 放流場所と再捕漁場

産卵期以降の、3月や4月には、磯崎から少し離れた長浜や松前沖、山口県の大水無瀬島や中島など島嶼部で再捕されています。

5月や6月には、磯崎から70km以上離れた、別府湾や菊間沖で再捕されています。カレイ類は海底の砂の中に隠れていて、あまり動かないイメージがありますが、潜水調査時には、マコガレイが海底を飛ぶように泳ぐ姿を見ることがあるそうです。マコガレイの移動能力の高さには大変驚かされます。

今年度も親魚の標識放流は継続しています。漁業操業時や遊漁などで、標識（タグ）のついた魚が獲れたときは、その標識についている番号と、獲れた日時、場所、そして漁法（釣り、建網、小型底曳など）をお知らせください。

おわりに

愛媛県では、産卵親魚の再放流とともに、積極的な資源回復の手法の一つとして、稚魚の放流も行っています。平成24年度以降、毎年、2万5千尾の稚魚に内部標識をして放流しています。漁業操業時などに小型魚が混獲されたときは、お知らせください。伊予灘のマコガレイ資源の回復のために、ご協力をお願いします。